

牧会事例研修会講義

2005 . 9 . 26 (月) 母の家ベテル
井上隆晶

A .【正教会の礼拝と出会うまで】

・《統一協会から洗礼を受けるまで》

大学時代、統一協会に行っていたわたしは、そこを脱会し、主の導きと計画により、日本キリスト教団の中にあるホーリネスの群れの教会に行った。『聖化』を重視する教会だ。創始者である中田重次が4重の福音「新生、聖化、神癒、再臨」を柱にしているグループだ。教団なのだが、福音派的であり、聖歌を歌い、祈りと伝道、奉仕に熱心であった。夏は聖会があり最後には、招きの座に出て涙を流して自分の罪を告白し、牧師から祈ってもらった。「清くなりたい。罪を犯さなくなりたい。」というのがわたしの強い願いだった。

・《神学校時代と第一回の霊的体験》

サラリーマンを4年して、結婚し、子供も生まれた。その後、牧師の薦めで、仕事を辞め、大阪キリスト教短大という神学校に行った。フリーメソジスト教団の神学校だったが、フリーメソジスト自体が何であるのかも何も知らなかった。ただ、授業料が安い(半年で12万円)のと、妻帯者には助かった。

・神学校に通っていても罪や悪い習慣からは自由になれなかった。河原での6ヶ月にわたる祈りを通して霊的に神に触れられる体験をし、牧師になるための大きな訓練を神様から受けた。私は恵みに感謝ができず、「あれも足りない。これも足りない。」と文句ばかりいていた。しかし、祈りの中でキリストは私に言われた。「私はあなたのために全てを与えた。衣も与えた。後、何をあなたに与えることができようか。」この声を確かに聞いた。嘘だとか、空耳だと思ってしまうかもしれないが、私は確かに聞いた。その証拠は、私がこの声を聞き、キリストに触れられた時、涙が出て止まらなかった。そして自分の罪深さと、底知れない恵みが同時に見えたのだ。そして腹の底から来る喜びに一瞬のうちに満たされてしまった。こんな体験は初めてだった。それはあまりにも甘味なもので熱いもので、この世の喜びにはない喜びだった。天国の喜びを私は垣間見たのだ。それから私は変わってしまった。私が変わったということがこれが事実である証しである。この体験が今の自分の基礎にある。自分の心を深く深く探りいつも見つめる。自分の心を深く分析した。内的覚醒。私は知らないで内観のようなことをやっていたのだ。

・《聖会の矛盾》

さらに、わたしの中にあった「清くなりたい。罪を犯さなくなりたい。」とい

う願望はわたしの神学を深くし導いていった。よく、畑野先生（組織神学）に聞いたものだ。わたしは洗礼を受けたら清くなり、罪も犯さなくなると思っていた。しかし、実際はそうではなかった。清さとは何か？どうしたら、赦されるのか？これがわたしのテーマであった。聖会へ行って、罪をゲロして精神衛生的にすっきりしても、山を降りればまた元の木阿弥だ。それを繰り返しているうちに清めが分からなくなった。ただ、人の前で告白すれば清くなるのか。人によって告白の違いがあるではないか。罪を告白できる勇気のある人はいいが、日本人の文化の中で、アメリカ様式が通用するのか。

「清くなったと信じなさい。そうすれば清くなる」といわれた。しかし、いくら頑張っても「私は清い。私は清い。」と信じてても無理があった。なぜなら、実際に罪を毎日犯しているからだ。「信じたら～になる。信じたら～になる」と信仰が清められるための条件になっていた。罪を犯すのは『自分の信仰が弱いからだ』と思ってしまい、結局自分を責めてしまうのだ。

ある時、聖会に行き、あなたは神学生なのだから証しをしなさいというので「私は、清めは大嫌いだ。」と証しをしたら、原登牧師は「先ほどの神学生は、清めが嫌いだといったが私は大好きです」と言われ、腹が立ったことがあった。この先生は私の苦しみを分かってくれないと思った。「清くなれないと救われない」といわれたが、「清くなれないから教会に来ているのではないか」と矛盾を感じた。

・《卒論のために正教会に行く》

卒論を何にするかにあたり、当時の流行だった《福音の土着化・日本的キリスト教＝東洋的キリスト教》と《清め》について書こうと思っていた。たまたま、友人が「おもしろい教会があるから行こう」といって、わたしを神戸のハリス正教会に連れて行った。とにかくびっくりした。仏教のお経を聴いているようで何も意味が分からない。蠟燭を立てて祈るだけで帰る人もいる。立ったままの礼拝で、初めて十字を切り、初めて祭服をまとった祭司というものを見た。それまでもカトリック教会や聖公会に行ったが、正教会にはびっくりした。至聖所と聖所、祭壇、十字架、ローソクの光、その光に浮かび上がるイコン、美しい祭服、香の煙と香り、鈴の音、鐘、美しいアカペラの聖歌。瞬間的に最も古い伝統的なものを体で感じた。それと同時に、旧約聖書の世界がそのまま受けつがれてきたような懐かしさを感じた。これが最も古いキリスト教だということが直感で分かった。伝統の教会というものを肌で感じた。理屈ではない。言葉も分からない。でも肌で感じた。

・《霊的神秘体験》

ここで、また私は2度目の霊的な体験をした。祭司が至聖所から持ってきた、聖杯を見た時、喉から手が出るほど欲しくなった。どんな罪でも告白するから

欲しいと初めて思った。私は瞬間的に悟った。これこそ「**唯一の聖なるもの**」だと。そして一瞬の内に悟った。「**自分の中には一切聖なるものはなかった。聖なるものは、自分の中には無く、外にあった。それは聖体であり、聖福音書であり、聖堂であり、聖なる教会、聖伝統であった。**」「**聖なるものに触れるから、わたしは聖になるのだ。聖なるものが入ってくるからわたしは聖なるものになるのだ**」と悟った。その瞬間、イザヤ書の6章のイザヤが神殿で神を見た時の、恐れと、祭壇の炭火に触れたので聖になり、罪が取り除かれたことを思い出した。(後で、神父にそのことをいうと、祈祷書の中にその文章がのっているという。そのとき、教派を超えて聖霊は働いていることを知って感動した。)礼拝中にわたしは、涙が出て止まらなかった。やっとたどり着いたと思った。ものすごい感動をした。**わたしは自分で頑張っていたのだ。自分の力で何とか清くなろうと思っていた。信仰は自分の感情だと思っていたのだ。清くなったと信じなさい。そうすればあなたは清くなる。と、「信じなさい、信じなさい」と聴くあまり、信仰が信じるかどうかの自分中心になっていたことが分かった。**

・《**靈的復活体験**》

そこからわたしは正教会の礼拝に参加し、多くのことを学んだ。50日間のレントの祈祷に毎日参加し、キリストの復活を体で体験し、靈的に覚醒をした。すべてが全く新しい発見であり、感動の連続であった。レントが始まる前に『**謝罪の祈祷**』というのをする。全員が聖堂に一直線に並び、一人ひとりが神父と抱擁し、肩を抱き合い、手に接吻して「どうか私の罪を赦してください」という。これを全員で行う。これには感動した。自分よりも年配の老人が、自分の前にひれ伏して「どうか私の罪を赦してください」という。教会が《**和解の場所**》を用意してくれているのが分かった。教会は弱い人間のために、制度を作り、回心の場を与え、祈りの階段を積んでくれているのだ。

都島教会でもさっそくこれを取り入れ50日間の修道生活をした。毎日4～5時間礼拝堂で祈り、断食をし、修道院が決めたとおりの祈祷を繰り返す。声を出して朗読する。立ち、拝み、ひれ伏す。4世紀のエフレムの祈りというのがある。何回も何回も十字を切ってはひれ伏し、『**神よ、我罪人を憐れみたまえ**』と唱える。祈祷が労働であることが初めて分かった。肉を断っているのに、肉が食べたくて食べたくて、復活祭が待ち遠しかった。苦しくて苦しくて、解放されたくてたまらなかった。その中で聖受難週間がどれほど重要であるのか、特に聖金曜日、聖土曜日が特にすばらしかった。それは簡単に口では言えるようなものではない。金曜日の夜の礼拝は十字架行進、キリストの葬りを再現する。礼拝堂の中に棺を置き、キリストが十字架から降ろされた聖画像を安置し花で飾りひれ伏す。**本当に《葬りの儀式・葬式の行進》をするのだ。そして祈**

禱文が永遠と読まれる。キリストが黄泉にくだり、死を滅ぼし、私たちの知らない内に、すべてを着々と完成させているのが分かった。聖書と祈禱と動作が一つになって、キリストのすごさが伝わってくる。

土曜日の午前中の礼拝では永遠と旧約聖書から《復活の預言、予象》の箇所を延々と朗読する。聖書の朗読が、聖堂の中に響く。それをただじっと聞き続ける。聖受難週間で、福音書の中の一つを声を出して通読する。これにも参った。神の言葉の確かさに寒気がした。礼拝堂で声を出して福音書を朗読するということの重要性が始めて分かった。土曜日の午前中の礼拝の中で、祭服が黒から白(金)に変わり、土曜日に復活の箇所が朗読されたとき、あまりのすばらしさ、死の敗北、キリストの勝利のすごさに、寒気がし、震えがきて、涙が出て礼拝が出来なかった。私は復活の意味が初めて分かった。この土曜日が最も重要なのだ。ほとんどの教会はこの聖土曜日に礼拝をしない。しかし、この土曜日が、安息日であり、これを《本当の安息日》にキリストが変容したことを知った。神は今、本当に安息に入ったのだ。

多分、正教会に出会わなければこの体験はできなかったのではないだろうか。そして日曜日、大声で「キリスト復活」「実に、復活」と声を掛け合い、十字架をもって町を行進する。キリスト教の源流を私は体験した。そして復活とは来世で起こるものではなく、聖霊によって今、自分の中に始まっているのが分かった。人間は復活し、キリストの像になるために創造された。それを今、自分が本来の目的に帰ったことを知った。

わたしは卒論に正教会の礼拝について書いた。実に、正教会が正統なる教会であり、神学も祈禱も、非常にしっかりしており、教父の伝統の上に立っていることを知った。

2000年の教父たち、教会の伝統はまさに宝の鉱脈にぶつかったようなもので、掘れば掘るほど、教父たちの神学と祈りと霊性の深さに驚いた。

クリュストモスの説教を紹介する。

そこで、わたしはプロテスタントが失い、知らされていないこの宝を復活させ、教会形成に生かそうと思ったのである。さらに、岩本牧師(教会史、教理史)の霊性と神学に影響を受け、東西分裂以前の教会を目指そうと思いいたるようになった。

B.【都島教会の礼拝改革の苦勞】

・《反対されて》

都島にこの礼拝を実現させること、これが私の夢になった。しかし現実には戦いの連続だった。当時、都島には2人の信者しかいなかった。彼らが祭壇を置くこと、香を炊くこと、イコンを置くこと、祭服を着ることを嫌がった。それら

が正教会になるという理由だった。プロテスタント信仰の悪い頑固さにはほとんど困った。他から学ぶという姿勢がなく、自分の教派が一番正しいと思っているし、自分が慣れたものが一番いいと思っている。教会が、廃墟のようでボロボロでも、それに慣れてしまうのだ。このままだったらいけないという気がまるでない。恥ずかしいという気も、神様が笑われていても全然平気である。自分が満足することしか考えていない。そして何もないことが謙遜だといっている。私は兎に角悔しかった。教会が笑われること、神様やキリスト教が無力であると笑われるのが嫌だった。ここは地域にはベビーセンターとしては知られていたが、教会として知っている人はほとんどいなかったからである。そしてある日、信者から「もう先生にはついて行けません。先生のせいで娘は来なくなりました。」といわれた。辛くてショックだった。もう牧師を辞めようかとも思った。日々祈った。のた打ち回るように祈っている時、キリストの声を聞いた。

「お前は どうして 絶望 するのか？ 罪人が 失敗 するのは 当然 ではないか。 罪人 だから 教会 に 来ている のだろう。 立派 だったら 教会 に 来なくても いい。 力が 不足 している から 祈る のだろう。 なければ 求めたら いい。 ただ それで 十分 ではないか。 倒れて は 置き、 倒れて は 置き だけ を して いれば 十分 である」

それで勇気が出て、自分が失敗することを恐れなくなり、開き直れるようになった。

・《7年間祈って出た答え》

私はこのスタイルで礼拝することのために、1990年～1997年まで7年間祈り続けた。「神様、わたしはこれでいいのですか。どうすればいいのですか。教えてください。」1997年に今の礼拝堂に改修した。私の神学、考え方を全部出した。これで行こうと決心した。祈りの中で、こう心が吹っ切れた。

「このまま中途半端でやっけていても教会はつぶれるだろう。どうせつぶれるなら、出来ることを何でもやってみよう。自分の個性を隠さないで思い切って出そう。それで駄目だったら悔いはない。ここで中途半端で終わったら悔いが残る。人の一生は一度しかない。精一杯生きてみよう。」

そして他人に批判されたらこう言おう。

「私はこれしか出来ません。正しいからしているのではなく、好きだからやっているのです。私はこれしか出来ないのです。これが私なのです。嫌だったらもっとすばらしい教会、牧師がいますからそちらにお出で下さい。」

神との出逢いは、人を強くし、人を自由にし、自分の個性を愛し受け入れることが出来るようにしてくださる。

「私たちは自分の個性を出して良いのだ。大切なことは自分に与えられた個性を生かして、それをういて大胆にのびのびと伝道することである。」

ヘンリー・ナーウェンが行き詰ってマザー・テレサを訪問した時のこと。『毎

日1時間祈りなさい。そして自分で正しいと思うことをすればそれで十分です。』といわれた。

二人の信者は去っていった。これは私の一生のながいパンである。このパンを忘れたくない。彼らを非難はしない。私わがままなのである。天国で彼らが私を主に訴えるかもしれない。「主よ、この人のせいで私は教会にいけなくなりました」。しかし、本当だろうか。行く気になれば、どこでも教会はあるのではないか。自分の心に正直に生きよう。

面白いことにこうして出来た礼拝堂に、いろいろな人がやってきてあっという間に礼拝堂がいっぱいになった。

・《ボロボロの中にキリストの愛を見た》

大教会に行っている生活保護者が家の近くにおられて(もう亡くなったが)しょっちゅう教会にやってきて、お金を貸して欲しいと行ってきた。「自分の教会に行って貰えば」というと「いいにくい」と言う。彼も母教会では立場があるのだろう。安心して自分の弱さ、裸が見せられないのだろう。彼が自分の教会の自慢をした。「家では何人洗礼を受けた」と。まあ自慢だと思っていないだろうが。でも、内心少し腹が立った。家に来てこんなこと言わなくてもいいだろうにと。でもその時思った。教会は大きいのも、小さいのもあるが、皆キリストの体であって、その質には違いはない。流れているのは同じキリストの血＝命であり、同じ聖霊が住んでおられる。親指も必要だが小指も必要なのだ。この教会を誇りに思う。建物はボロボロだけれども、これがキリストの体であるという。キリストは喜んで「これが私の体だ」と言われる。嬉しくなる。

この柱、床、すべてがキリストだと思って良く掃除をした。

神が人になった。これが救いである。これだけで救われる。

教会には問題を抱えた人、生涯を持った人、弱い人が来る。都島は特に多い。なぜ、もっとしっかりした方が来てくれないのだろう、自分に魅力がないからかなと思ったこともあった。他の教会が立派でうらやましく見えたこともあった。しかし、キリストはこの問題のある、なかなか成長しない、理解しない、悟らない人を自分の体として受け取ってくださっている。ここに救いがある。

・教会の価値はどこにあるのか？建物が大きくて、人が沢山いて、行事をたくさんして、お金が沢山あったら教会は立派なのだろうか。そうではない。教会の価値は、人間の業にはよらない。何かが出来から、何かを持っているから、教会は価値があり尊いのではない。教会や信者の尊厳は、キリストがそれらを自分の体だと言って受け取られたからである。キリストの愛こそ誉めたたえるべきものである。

私は、人もいない、建物もボロボロ、お金もない、何も出来ない中に、神の国を見た。神の国がからし種ではなくて、大木に見えた。何も無い、何も出来ない時に、牧師がいつも暗い顔をしていたら一体誰が教会に来るだろうか。こんな時こそ輝いていられるかどうか試されるのだ。誰でも大きく、強く、豊かなものに神の国を見ることは簡単にできる。しかし、小さく、貧しく、弱いものの中に神の国が見ることが出来るためには信仰がなければならない。それには《自分が何かが出来たことを喜ぶ信仰》ではなくて、《神が私にしてくださいましたことを喜ぶ信仰》でなければならない。この《復活信仰》をわたしは伝道所時代に訓練してもらった。

《必要なものはいつも与えられてきた》

朝も、晩も妻と祈った。ベビーセンターをしながら、朝夕祈った。3年間は祈っていたように思う。やがて経済的な理由から30年以上続いたベビーセンターを閉じた。収入が10万円一度になくなった。それでも怖いとは思わなかった。神学校時代に、生活は神様が何とかしてくれるという信仰を体験していたからだ。都島でも奇跡を何度も体験した。天からのマナは確実にあった。突然多額の献金をしてくれる人が現れた。結婚式の依頼が来てホテルで定期的に行えるようになった。収入は決して減ることはなかった。

C【正教会の礼拝から学んだこと】

《レットルを貼らないこと・まず体験して欲しい。教会はひとつ。》

わたしは統一協会に行き、視野が狭いことがいかに恐ろしいことを体で体験した。それからは、聴いたものはまず自分の体で見よう、体験してみよう、それから判断しようと思った。右を見たら、左を見る。自分と反対のものを学ぶのだ。それでやって正しい判断ができるのだ。統一協会からの救出活動を10年間行う中で、説得のノウハウを覚えた。まず、相手の経典を読んで学ぶまでは、レットルを貼らず、勝手に決め付けないことの大切さを知った。そこでプロテスタントはカトリックを知らねばならず、プロテスタントもカトリックも西方の教会だから、東の教会を知らねばならない。それでやっと分かるのだ。わたしは神学校3年の時に、いろいろな教会に参加して、体で礼拝を知った。妻も一緒に連れて行って体験させた。

その結果、「バランスを失うことがいかに危ないか」ということと、「本物はどこにもいるし、偽物もどこにもいる」ということを知った。完全に西方教会の思考回路になっているプロテスタントは、東方教会の思考を学ぶべきである。それは、全く違うからである。聖地旅行にいくら行っても、何も学んでこないのはおかしいではないか。一体何を見てきたのだらうと思う。すべてが17世紀に始まったと思うのは傲慢である。教会史、教理史を学べば分かることだが、教会のルーツは東にある。プロテスタント教会は、ほんの一部分の神学にしが

みつき、ああでもない、こうでもないとけんかをして分裂しているようなものだ。私は好き好んでプロテスタントに来たのではない。たまたま来た所がプロテスタントであったというだけだ。何も知らなかった。私はキリスト教を3つに分けたのは神ではないと思う。キリストは3つに分けられたのか。正教会やカトリックの持っている伝統の宝をプロテスタントが持つてはいけないとは思わない。自分自身、プロテスタントでもローマカトリックでも正教会でもないものを目指している。教会は一つだと思っている。神もそれを望んでおられる。岩本牧師がよく授業中に言っていた。「天国に行ったら教派別に分かれることはない。キリスト教は一つである。今からどの教会の人とでも仲良くできない人は天国に行って苦勞するであろう。」なぜなら、神の国は場所ではなく、聖霊による支配なのだから。たとえあなたがエルサレムに行っても、ゴルゴタの丘に立っても、心が争そっているなら天国ではない。体を天国に持っていても心が天国でなければ何にもならない。

《体全体で礼拝する大切さ》

プロテスタントの礼拝は、神の言葉中心である。つまり、お話しを聞くということに重点が置かれている。だから、立派なお話しをしなければならない。聞く方も理解力・忍耐力が試される。正教会はそうではない。説教は10分～15分くらいである。礼拝全体が説教であると神父にいわれた。とにかく動作が多い。立つ、かがむ、ひれ伏す、十字を切る、ローソクを立てる。耳で聖歌を聞き、祈りを聞く。目でイコンを見、司祭の動作を見、口で聖体を食べ、十字架に接吻する。鼻は香の香りをかく。つまり五感全体で礼拝するのである。祈りは、唇と体とで行うものだと修道士はいつている。人間というものを肉体と魂に分離しない。一体なるものとして見ている。だから、言葉を理解できない幼児や知的障害者、痴呆の方、弱い人にとっては神を感じられる礼拝なのだ。プロテスタントは霊肉二元論的であり、現代のグノーシスである。知識を重んじるからである。

人間というのは、映像で多くを覚えている。痴呆性老人は同じ景色のところを徘徊するという。祭服を着ていたら思い出してくれた。色で覚えているという。『宗教のリアリズム』というのが今の教会にはない。観念、思想の中に生きている。若者がカルトに走るのは、そこにリアリズムがあるからである。正教会には信仰のリアリズムがある。

《間違った偶像崇拝の知識》

一番困るのは、イコンを偶像崇拝と思っていることだ。イコンとは「像＝イメージ」という意味である。イコンを通して神を思い出すのである。神の業を想像するのである。聖堂やイコンは神の国のイメージトレーニングなのである。言葉を理解できない幼児や知的障害者、痴呆の方、弱い人にとっては、この神

の国のイメージトレーニングはものすごく大切なのである。自分が神に守られ包まれているという安心感を得られるからである。

三位一体を正しく讃美する教会のどこが偶像崇拜なのだろうか？むしろ、三位一体がわからないで、礼拝している者の方が、偶像崇拝者であると思う。

《十字架中心か、復活中心か。原罪の間違った理解。》

十字架中心が西方教会だ。復活中心が東方教会だ。

先日《原罪》なるものの意味を聞かれた。洗礼を受けて赦されるのは、アダムの罪か、自犯罪か、連帯罪かといわれた。プロテスタントはすぐに分けるのが好きだ。東方の神学にはこのようなことは一切聞いたことがなく、そんなことは考えられない。

《聖なるものはどこにある。》

正教会は聖なるものを外に置く。聖器物がある。聖堂がある。聖所がある。聖イコン、聖祭服がある。

プロテスタントは聖なるものは、外には無く、自分の内に置く。つまり個人の信仰に置く。自分の信仰といっても、感情であるから、いつもぐらぐらして確信がない。自分が聖だと思えば聖になり、聖だと思わなければ聖にはならない。宗教改革者の聖餐論などは、この類である。すべてが自分の信仰だからだ。しかし、それでは聖書や聖餐は自分が聖だと信じなければそうではないのだろうか。そんなことはない。人間が信じようが、信じまいが、聖なるものは聖なるものである。人間が信じようが、信じまいが、三位一体は永遠に存在される。人は聖なるものに与って初めて聖になる。旧約聖書などを見ると、すべてそのようになっている。聖なる方は神だけである。その神と交わるから聖になるのだ。

反対にプロテスタントでは、聖なるものは信仰だから、自分が信じなければと頑張ってしまう。そこで勢い、意識が「信じなければ」という自分の信仰、感情に向く。意識が上なる神ではなく、内側に向くのである。それは現代の福音的律法主義になる。プロテスタントの方が、ファリサイ人のようである。一見、敬虔に見えるが、それらは人間の業である。障害者はこれに疲れてしまう。聖なるものは外にあるからいいのだ。弱い人や、病気の人や、老人はどうやって頑張ることができるだろう。彼らは頑張ることができないのだ。口で言っていることと、人間が実際に求めているものは違うのだ。

《神中心か、人間中心か。》

プロテスタントの中心は、自分の救いだ。一方正教会の関心は、人間ではなく神にある。誰が礼拝に来ようとお構いなしだ。統計も取らない。出席も取らない。三位一体を正しく礼拝し、拝むことが正教会の中心だ。オーソドックスとは「オルソス」と「ドクサ」からできており、神に正しく栄光を帰す教会とい

う意味だ。だから、三位一体の讚美詞がものすごく多い。典礼の祈祷文から、聖歌はすべて三位一体の讚美で構成されている。三位一体論が教会の基礎である。これがぐらつくとキリスト論がぐらつく。キリスト論がぐらつくと教会論がぐらつく。教会はキリストの体だからだ。キリストを正しく完全なる神として、同時に完全なる人として礼拝しているだろうか。正教会の礼拝の基礎は、ニケア信条だ。とても神学的にしっかりしている。一方、プロテスタントは信条によって神を告白しようとしなない。ほとんど「父なる神よ」としか祈らない。または「イエス様」「聖霊様」と祈る人もいるが、分離して祈っている。「父と子と聖霊の神」とか「三つにして一つなる神」とか「一体にして分かれざる聖三者」というような祈りをしなない。関係によって祈ろうとしなない。ひどいのは讚美歌の歌詞である。「三つにいまして一人の神」と歌っており、モナルキアニズムになっている。「一人」では異端である。「一つ」でなければならない。しかも三位一体など分からなくてもいいとまで言っている。とにかく、神中心ではない。キリストは拝むべき父と同質、同座なる神ではなく、わたしたち人間の側にひきずり降ろして、人類のための代表のささげものだと思っている。十字架が三位一体の神の業であることを忘れている。

《切れてしまう神学と、切れない神学。》

西方は「義認」「聖化」というように切ってしまう。しかし東方は切らない。幹であるキリスト＝教会に繋がるかどうかで見ている。繋がればやがて開花し、実を結ぶ。離れれば花は萎み、実も実らない。成長するかどうか、生きるか死ぬかで救いというものを見ている。だから「義認」「聖化」というように切らない。「義」とされたのだから罪を犯さないとか、一度「聖化」されたら罪を犯さないなどは思っていない。「義認」「聖化」もいつも同時に来る。「聖化」に終わりは無く、限界や条件をつけない。「義認」は一度だけではなく、信仰の生涯の内、いつも信じることにより再現される。どうも西側は、西洋医学のように切るという発想のようだ。それぞれの神学を細分化してしまう。東側は、東洋医学であって時間をかけて人間性全体を癒してゆく。神学は切らない。関係性で見てゆく。

《バランスを失っているプロテスタント》

《教会と聖書》…福音書だけでも10位あったのに、それを整理したのは教会会議であった。教会が聖霊と共に聖書を聖典化したのである。聖書よりも教会が先にあった。その後、いろいろな異端の考えを協議し、五つの世界信条をつくったのも教会会議であった。聖書のみになると、再び山ほどの解釈が生まれ、人の頭数ほどの解釈と共に教派に分裂していった。伝統的教会の中で聖書は読まれるべきであり、聖書によって教会は規制されるべきである。このバランスが大切だ。世々の教会の伝統という《大きな幹》につながらなければなら

ない。

《**行いと信仰**》...信仰のみなどということはありません。行いが伴わなければ、信仰は死んでいる。プロテスタントは、《修道・修行》ということ放棄してしまった。《修道・修行》イコール《律法主義》だと思い込んでいる。《律法主義》とは「救われるために～をしなければならない」というものだが、《修道・修行》というのは「既に救われているから、その恵みを失わないために行うもの」である。どこに勉強をしなくても、勉強ができる人がいるだろう。聖書を読まず、祈りに時間をかけずに何を悟れるだろう。ほとんどは時間の勝負なのだ。信仰は、神との交わりの時間をどれほど多く持つかで決まる。また、修道、断食、節制は、自分の罪深さ、弱さを知るためにこそ行うのであり、救われるための条件ではない。そして、多くの場合、知識はすぐに忘れるが、体で覚えたことは忘れないのである。

《**自由意志と恵み**》...いくら神が恵みを与えても、人間が手を伸ばして欲しいと思わなければ自分のものにはならない。救いは、人間の意志と神の恵みの共同の働きである。

この三つのバランスが大切である。プロテスタントは「聖書のみ、信仰のみ、恵みのみ」としてルター崇拜をしていて、現実を認めようとしなない。認めたらプロテスタントではなくなってしまう、自分の存在理由を失ってしまうからだ。